生意気な天才

蓮斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
生意気な天才

【Ｎコード】
Ｎ４７７８Ｒ

【作者名】
蓮斗

【あらすじ】
小さな探偵事務所に、「俺を雇え」と青年がやって来た。
なかなか帰らない青年に、幾つかの問題を出してみる。
青年が正解したなら社員として採用、不正解なら諦めて帰る。
そう約束した。

出会い（前書き）

コメディー＋トンチみたいな作品です。

出会い

私の名前は、新井智則。先日４９歳になったばかりだ。
ただ、やはり４や９という数字は縁起が良くないのだろう。朝っぱらからついそんな事を思ってしまう。

「俺を雇ってくれ」

昨日の夕方の事だ。一人の若者が、私の事務所を訪ねてくるなりそう言った。

私は探偵だ。
と言っても、ドラマのように事件に巻き込まれる事は無く、仕事の大半を浮気調査が占めている。
そんな小さい探偵事務所に変な若者がやって来た。
見た所、二十歳前後だろうか。何処にでもいるような普通の青年だった。
今時の若者は皆同じような顔をしている。
中年の私には見分けがつかない。
だが、ハッキリ言ってそんな事はどうでもいい。
気になるのはコイツの言葉遣いだ！
雇って欲しいのに命令口調だと？
どういう神経をしているんだ？
だから私はゆとり教育に反対だったんだ！
――しかし、『今の子はキレたら何をするか分からない』そうテレビで言っていた。
うん、とりあえず話を聞いてやろう。私はそう思った。

「まぁ座りなさい」
私の言葉に小さくうなずき、その青年はソファーに腰掛けた。
コイツが足を組んで座った事には突っ込まない。何故なら私は大人だから。

「君、名前は？」
「俺の名前は連正義（むらじまさよし）。
皆はレンって呼ぶよ」
愛称なんてどうでもいい。
何故私の所へ来たのか、皆目見当もつかない。

「それでどうしてここに来たんだい？」
「いや、俺って天才だろ？　だから事件とか解決してやろうと思ってさ」
「えっ？」
開いた口が塞がらない。頼む、誰か私の口を塞ぐ方法を教えてくれ。
いきなりやって来た自称天才。自称ほど当てにならないものは無い。
新手の詐欺だろうか……。

「悪いけど帰ってくれ」
「いいじゃん、別に暇なんだろ？」
「何でそんな事がお前に分かる！」
いかんいかんつい声を荒げてしまった。
それでもコイツは帰る素振りすら見せない。

「――仕方無い。じゃあ君に問題を出そう。
それが分かれば採用の件は考えてやっても良いが……」
「問題？　俺の実力を試そうって言うのか？」

コイツは鼻で笑いながらそう言った。
いちいち腹の立つ男だ。

私は軽く辺りを見渡した。
ふっと目についた水槽。水は入っているが、中に魚は居ない。
職業柄家を空けることが多く、何匹かいた熱帯魚も死なせてしまったのだ。
――よし、これを使おう。

「あの水槽を空にしてみてくれ。この部屋の道具は何を使ってもいい。ただし、回数は出来るだけ少なくな。
例えばコップ（２００ｍｌ）一杯で水を掬ったとする。それで１回だ。
あの水槽の中には、約８リットルの水が入っている。コップを使うとしたら、４０回だな。
さて君なら何回で出来る？」

「道具は何を使っても良いんだな？　制限時間は？」
「制限時間？　そんなものは無い。問題は回数だ」
この部屋は事務所兼自宅として使用している。日用品ならたいていの物は揃っていた。
「食器、鍋、スプーンやホーク、ストロー、バスタオルだってある。ハサミやナイフ等で道具を加工しても良いぞ」
――さてと、偉そうに言ったが、自分でも問題の答えを考えていなかった……。
何回で出来るだろ？
いやそもそも問題が悪い。答えなんて無いんじゃないか？
あっ！　待てよ……あれを使えば一回で出来るな。
ポリタンクに入った灯油を、ストーブに移す時に使うシュポシュポするやつ。

あのポンプを使えば、一回で出来るじゃないか！
おっと、自然と顔がニヤけてしまう。落ち着け私！

「なぁ、まさかそんな簡単な問題で、即採用なんて事は無いんだろ？」
「何？」
この男やっぱり頭が悪いんじゃないのか？
こんな短時間、しかも部屋に何があるかも確認せず、簡単だ等と言っている。
まさか……コイツもシュポシュポに気付いたのか？

出会い（後書き）

連がみつけた答えとは？

答えともう一問（前書き）

８リットルの水が入った水槽。
それを空にする方法。

答えともう一問

コイツの余裕な態度がどうも引っ掛かる……。
あのポンプはまだ見付けていないはず。
と言う事は、私が何か見落としているんじゃ……あっ！
『水槽に触れてはいけない』って言ってなかった！
何をやってるんだ私は！
それなら水槽を持ち上げて、水を捨てる事が出来るじゃないか！
――今からでも間に合うか？

「ゴホン！　すまん、ルールを1つ言い忘れてた。水槽に触れてはダメだ」
「いいよ別に触らないから」
「え？」
違うのか？　じゃあコイツは一体どうやって、水槽を空にするつもりだ？

「随分と自信があるみたいだな。そろそろやって見せてくれないか？簡単に出来るんだろ？」
ハッタリに決まっている。私はそう思って、上から目線で言ってやった。

「簡単だよ。じゃあそこにあるノートパソコンを水の中に入れて……」
「ま、待て！　そんな事をしたらパソコンが壊れるだろ！」

「冗談だよ」
何？　冗談だと？
法律が無かったら殴ってやるのに。

「とりあえず次の問題を出せよ」
「何？　まだ答えを聞いてないぞ！　次の問題を出せとはどういう事だ！」
「ん？　何だ？
もしかして俺の答え違うのか？」
「だからどういう事だと聞いているんだ！」
「水槽の水なんて放って置けば、蒸発して無くなるだろ？
制限時間が無いって言うから、そうだと思ったんだけどな。
違うのか？」

「――良く分かったな」
精一杯の強がりだった。
確かにその方法なら道具は使っていない……つまり0回だ。
そんな事、私だってちょっと考えれば分かったさ。たぶん……。
「それで採用は無いにしても、正解したんだから何か貰えるんだろ？」

何だそのシステム？　いつそんな事決めた？
1回当てたからといって調子に乗るなよ。
「――でもまぁいい。晩飯くらいは出してやろう」
私は出前のメニュー表を取り出し、仕方無いので、コイツにも見せてやった。
そうだ！　これを使って出題しよう！
何を食べようか迷っている時に、私は閃いた。
「ここで次の問題だ。私が食べたい物を当ててみろ！」

「は？」
「多すぎるから9択にしてやろう。
私が食べたい物は、1、海鮮丼　2、カツ丼　3、天丼　4、ひつまぶし　5、蕎麦　6、カレーライス　7、うどん　8、ピザ　9、親子丼だ
質問は2回まで。そして、私はその質問にＹｅｓかＮｏでしか答えない。その2択で回答出来ないものには答えない」
「つまり、ＹｅｓかＮｏでなら何でも答えてくれるんだな？」
「分かる範囲でならな。『隠し味に塩を使ってるか？』とか聞かれても分からないしな。
じゃあ制限時間は今から5分だ
“天才”とやらには簡単すぎて暇つぶしにもならないか？」
少し大人げなかったかな？
フフフ、だが今度は制限時間を決めてやったぞ。
どうだ？　お前に答えが分かるか？

「2回質問していいんだな？」
「あぁ」
「じゃあ1つ目の質問だ。
あんたの食べたい物は『ひつまぶし』か？」

「は？　そんな質問でいいのか？
それを外したら8択だぞ？
8択を後1回で当てなきゃいけないんだぞ？」
バカかコイツは？

「うるさいな。ＹｅｓかＮｏで答えろよ」
「――Ｎｏだ」
相変わらず生意気なヤツだ。
私が食べたいのは天丼だ。

この問題、2回の質問で答えを出せる。
私はこの前、携帯小説でこのネタを知ったんだ。
だが、東大（東京工芸大学）卒の私なら、少し考えれば分かったがな。

「なんだ違うのか。さっきひつまぶしって言ったような気がしたからさ」
「私は暇つぶしって言ったんだけど……」

答えともう一問（後書き）

だじゃれで終わりました。
コメディーですから！
ネタが無く、次の解答編で完結してしまいそうです（汗）

ここプロ様の『ミラーハウスの怪』のネタを勝手に使ってしまいました。
早急にお詫びをいれておきます。

答え（前書き）

８択の問題を、１回の質問で答えを出す。
制限時間がある所がポイントです。

答え

連は9択だった問題を1回めで外し、次で当てなければいけなくなった。

ハッキリ言って無理だろう。
私はＹｅｓかＮｏでしか答えない。
答えを知っているならともかく、私が何を食べたいかなど分かるはずもない。
――残り時間は約４分。
さぁ、答えられるものならば、答えてみろ！

「あんたの食べたい物はこの中にある？」

「ちょっと待て！　そんな質問でいいのか？」
いくらなんでもそれじゃ分からないだろ……。
「慌てるなよオッサン。続きがあるんだから」
「続き？」
「あぁ、その質問にｙｅｓかＮｏで答えろ。
ただし、番号の数だけ秒数を使ってな」
「――え？」
何？　どういう事だ？

「さぁ早くしろよ！　これは最低でも9秒プラス、俺が答える時間が掛かるんだから！」

「ちょっと待て！　分かりやすく説明してくれ」
「この中に食べたいものがあるのは確実だろ？　つまり、Ｙｅｓで

回答するよな？　だから、１番の海鮮丼なら1秒使って『Ｙｅｓ』、６番のカレーライスなら、『Ｙｅ・ｅ・ｅ・ｅ・ｅ・ｓ』って感じで、６秒使うんだ」

「そ、そんな方法アリなのか？」

「じゃあ逆になんでダメなんだ？　制限時間内だし、ご丁寧に番号までふってくれたのはアンタだぜ？　それに、回答はＹｅｓでしてもらうんだからルール違反じゃ無いだろ？」

「――あ、あぁ」

その後私は3秒間『Ｙｅ・ｅ・ｓ』と言い続けた……。

これが9番の親子丼だったらと想像すると、少し恐ろしい。

9秒間も『Ｙｅｓ』と言い続ける姿など、辱しめ以外のなにものでもない。

生まれて４９年、この日食べた天丼ほど胸焼けした物は無いだろう……。

ただ、約束は約束だ。

雇うことにしてやろう。

実際頭はかなり切れるようだし、何か役に立つかもしれん。

コイツが無職でいるのは、きっとその生意気な性格のせいだろう。

普通に考えて、こんなヤツを一般企業が雇うわけ無いからな。

「仕方ない約束だ。うちで働きなさい。

ただし、あの水槽が空になってからな！」

そう、最初に出した問題は解き方が分かっただけで、結果はまだ出ていない。

ある意味私の勝ちだな！

「――じゃあ今日からここに住まわせてもらうから」

「え？」

「だっていつ空になるか見てないと分からないだろ？」
えっ……ちょっと待て！
「それって働かないけどうちに居座るって事か？」
「あぁ、仕方ない」
お前が言うな……。
あぁ、なんでこんなヤツと一緒に暮らさなきゃいけないんだ……。
若い女なら良かったのに……。

答え（後書き）

いつかこの２人が活躍する物語を書ければと思います。
短いながらも、最後まで読んでいただき有り難うございました！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4778r/

生意気な天才

2011年3月14日21時55分発行